

ロッキード事件の視点と課題

編集部

事件が発覚してからの経緯は別として、暴露され明かされるに過ぎない。た諸々の事実とその相互のつながりは、日常のわれわれの生活感覚とは桁はずれの数字によつて示される利権、それをめぐつて繰りひろげられている権力を握る者たちの隠された行動と生息をわれわれに垣間見せてくれた。もしこれが、無縁の世界で展開された一つのドラマであつたならば、晴々とした追跡者の心境にたつて、いかほどのサスペンスを味わいつつ事件の経過を見守ることができるといふものである。

しかし残念なことに、事件はわれわれが働き、食べ、日々生活している日常につながり、意識するしないにかかわらず、大きな力をもつて生活に影響を及ぼす現代社会の政治と経済の権力そのものの発露である。そして、事件の進展に焦点を合わせれば合わせるほど、時として、われわれは憂うつな淵に追いやられてしまう。あまりにも強大な社会機構とそれを操作する諸権力の大きさを前にして、われわれがあまりにも微小で非力なものと思われてしまうときに、人々の味わうあの寂寥とした気持である。でも、抗議と批判、抵抗に立ちあがつた数多くの行動に伍して、自分なりの意志表示を考え決意するとき、その気持と決意を維持しつみ重ねていくことに、本誌が幾らかの寄与を果

たせないかと考えた。これは、そのためのさやかな意志表示である。こうした立場から、ロッキード事件をどのような視点でわれわれは捉えるのか、そして事件が提起した諸問題に本誌の立場からどのような関わり答えていくのかを考えていきたい。ここでは、問題を原則論的にたてていくが、このことの現状での有効性は不問にしたい。それはここでの問題提起の延長上に生ずる成果への幾許かの確信をもっているが故にである。

△「構造」をどう表示するのかV 今回の事件を「構造汚職」と評することが一般化している。現代社会の経済権力を具現した多国籍企業の経済行動が国家権力の場を舞台として展開した駆け引きは、確かに、社会体制の内在的ともいえるほどに密着して繰りひろげられている。経済の行動原理と思想、政策担当者の政権掌握をめぐる画策との間に生まれた連携行動は、十分に構造汚職という言葉に含意されよう。しかし、ここで次の指摘を述べることは有意義であると思う。それは、より一般的にも指摘されることであるが、「構造」なる言葉が単に強調語としての意味と役割をしか実際には果たしていないことである。従つて、われわれは「構造」をより具体的な思考と制度的表現へと推

し進めなければならぬ。

例えばよく引き合いに出されるシーメンス事件(一九一四年)と比較しても、この本質において両者には何ら差違はない。利権をめぐる葛藤は時代を越えている。しかしここでより厳密に指摘されなければならぬのは、各々が舞台とした社会体制の相逢を、とくに権力機構の変化に対する権力抑止のチェックがどう対応しているのかという視点で再検討する必要がある。構造汚職が、社会体制に根深くかつ密着した不正行為であるとするなら、同様に何故その逸脱に対する制度上の抑止が社会体制に内包されていないのかを、「構造」以上の意味と具体性をもつて論じていくことが必要であらう。

△告発の主体V 社会の現行制度と機構とが、いわば汚職する側の手で作りあげられてきていることに異存はないであらう。しかも民主主義という欺瞞の名分のもとにある。とするなら、汚職を汚職として腹の底から怒れる者が、自らの怒りを、不正に対抗する制度や機構として表示することが大切ではないか。ここでいう制度や機構とは二つの異なるものを意味している。一つに純然たる現行の政治制度と機構であり、その中にフィード・バックとしての抑止機能を内蔵させることを意味している。他の一つは、現行の政治制度や機構の外に構想する自主的組織、もしくは慣例的な存在と機能である。

よく言われることであるが、今回の事件は戦後日本の政治の体質を実によく、象徴的なほどに浮き彫りにした。それは政治の貧困さを改めて思い知らせる。そうした事態に対しては、政治権力に対する多様な数多くの対抗的な核が、社会的にさまざまな方法と形態のもとに形造られることなくしては、何ら根本的な解決にならない。この点は自

明であるが、そのための現状認識と思想的な基盤が、今日、いろいろな形のもとに問われていると考える。

△野党の対応とその限界V 政治的な場で事件の真相追及を担った野党の行動をみていると、批判能力(裏を返せば政治担当能力ということになる)のない実態をまざまざと見せつけられたという気がする。

国会の証人喚問でのやりとりを見聞きしていると、どうしても茶番でしかない。一部には、例えばアメリカと日本との証言宣誓のちがひ(制度的あるいは文化的にも)を指摘する人もいるが、問題は要するに問う側の姿勢とそれを支える証拠(情報集取能力)や偽証に対する制度上の社会的制裁にある。すべてが成り行きのままに進行しているだけであつてみれば、証人はじつと、のらりくらりと答えつつ限られた時を耐えていけば済むのである。しどろもどろに汗をふきふき証言台に立つ証人は、ただただ羊のごとくおとなしく、人々の同情を誘いすらする。発言を証拠によつて確定しない限り、何度もくり返される場面であらう。同様の答弁は、日々、同じ場所政治家によつてくり返されていることを思えば阿保らしくなってくる。国会内での、あのようなを得ない発言と態度を国会侮辱として誰一人問題にできないのは、同じ穴のムジナということか。

こうした点は、アメリカ側資料の提供に関する対応にも指摘されるだろう。捜査資料に関する対米依存は別としても、日本の司法・捜査当局への積極的な監視、より基本的には後述する国政調査権の十分な行使などの対応が全くなされていない。そして捜査資料公開の制限という、考えれば当然ですらあるアメリカ側の対応に、野党はこれまた

「主権の侵害」といきりたち、「対米再交渉」を自民党政府に要求した。確かに政治的対決の局面をそうして演出することは出来たが、こうした表面的・一面的な戦術は、結果的には問題をつきつめることなく時間の空転と、時間の切迫による不明確な妥協に自らを落ち込ませる。もう少し、多面的でねばり強い方法と思考をもって臨まない限り、相変らずの龍頭蛇尾に終始することは明白である。

最も正統な手段・方法である国政調査権、すなわち「両議院は、各々国政に関する調査を行ない、これに関して、証人の出頭及び証言並びに記録の提出を要求することができる」との条項の実質化（これらでタナ上げしてきたことの責任は別としても）、あるいは、行政府主導の立法から離れた積極的な議員立法による政治的主張の行使といった本道を日常的に踏みかためねばならぬだろう。

△政治批判の眼と習慣V 汚職や選挙違反などの政治的不正行為に対する批判と抗議は、感情的に爆発するが一時期をすぎると政治的ヒステリー症状から脱してしまい、その過程で作用する政治的操作によって結局はうやむやにされてしまう、こうしたこれまでの一つのパターンがよく指摘される。ときとしては日本人に特徴的な一過性であると言われる。こうした指摘は、その全てが正しいとは言わないまでも、過去の多くの事例に共通した特徴を示していることは疑いない。最近では、糸山英太郎の選挙違反があった（任期中に彼を辞任に追い込む判決は時間的に無理となつた）。

こうした過去の事例は、等しくわれわれの反省の材料としてあるだろう。うつけきした政治不信に対する義憤として発揮される政治批判が、われわれの間には確かにあると思う。われわれはこれまで、日常

的な政治批判の姿勢と手段をもち得なかつた。憲法の条文は学校教育の必修である。しかし、政治的批判の訓練を受けたこともなく、そのため場と手立てが社会的に整備されているわけでもない。日常に接する政治の制度と機構は上意下達のものでしかなかった。こうした現状において、政治批判の眼と行動、そのために必要なさまざまな手段方法をわれわれは個人の能力としても、また社会的な制度やシステムとしても追求していかなくてはならないだろう。

とくに今後において一層重要であるのは、情報の公開とその管理であると思われる。国民の知る権利をめぐる論議は、政治による事態の隠蔽と秘密主義に対するよりねばり強い主張と監視の組織化に向かわなくてはならない。政治の分野に公開の原理を導入することは、必然的ともいえる社会組織の権力化を常にチェックする対抗機能として政治機構もしくは社会的に組み込む方向と方法を追求することも欠かせない。

△ジャーナリズムの責任V 毎日新聞（二月二八日）に「事件捜査の突破口は内部告発だ」という社説が掲載されたという。この種の事件解明に内部告発がいかに重要であるかは言うまでもない。しかしとつてつけたような発言しかくり返さないマスコミの論調をみていると、虫のいいことを言うなと思う。

一方に確たる論陣を張つたジャーナリズムがない限り、内部告発は生まれようがないのではないか。こう考えることに何の無理があるだろうか。元来、この種の事件にまつわる情報にもっと近く、かつ幾多の手段と条件を備えている政治や経済担当のジャーナリストたちは、一体これまで何をしていたのだろうかと思わざるを得ない。機構的な

かでの制約があることなどは言訳けにもならない、そうであつたならば自らが率先した内部告発者たり得たろう。

マスコミやジャーナリズムに関する諸問題には、一面では確かに受け手の問題もある。受け手の批判や、支持がよりよいジャーナリズムを生み出す一因であることを否定するつもりはないが、そうかといって安易に頷くことはできない。安易に首肯すれば責任の転嫁と不分明さを生み出すことになる。ジャーナリズムが自ら確定した領域を持つ以上、その領域内でまず自身が対決することであると思う。

△経済体制そのものへの批判V 事件は現代社会のさまざまな問題を集約的に露呈しているが、最終的にはその根底に横たわる経済体制の問題を明確に把握していかなくてはならないだろう。タテマエとしての自由競争という経済原理が、独占・寡占という経済体制のもとに体を成していないことへの批判は経済に対する根源的な問いとなるであろう。個別的・具体的には、独占禁止法の改正問題から多国籍企業の経済行動（日本の企業がアジア諸国において、ロッキード社と同様の経済活動を展開していることは言うまでもない）、さらには後進諸国との経済協力のあり得べき姿など、数えあげれば切りがないであろう。

また、経済の国家管理や計画原理といったもう一つの経済体制についても、歴史的にみて再検討される時代に来ている。それは社会主義のもとに構想された経済の「社会化」が、国营化・国家による計画経済という形態をしか取り得なかつたことに對する批判であり、同時に社会化の新たな表現形態への模索である。

いささか問題を大きく掛けすぎてしまった嫌いはあるが、事件を契

機に顔をのぞかせた現代社会の病相に対して、われわれが負う問題設定のための、一つの思考試案として受け取って欲しい。

△道義的な立場と力V 現在、事件の解明とその刑事責任の追及が捜査当局によつて進められている。刑事責任を問う限り、当然時効云々が論じられる。しかし、公的地位を利用した不正行為に対する政治責任・道義的な責任がもつと追及されてもいいのではないだろうか。公的であればあるほど、その公的・社会的性格の故に、道義的な責任を問うことが改めて強調されるべきである。例えば、今回の事件で丸紅がどのような形で責任を問われるのか。合法的な商取引の範囲内と見なされる限り、その刑事責任からは当然免責される。それだけで済まされていいのだろうか。丸紅に関しては、札幌市が「今後は丸紅との間に請負契約をしない」という方針を決定し（三月二日）、同四日には東京・埼玉・神奈川・横浜・川崎の首都圏五革新自治体が、当分丸紅と事業契約を結ばないことを申し合わせた。

法律的なものに対する、この道義的な力を改めて考えてみたいと思う。道義的な力こそ、人々の内に脈打つ思想の基礎であり、行動の源泉である。権力はそれを恐れ、抑圧と同時に法的欺瞞を図る。それ故に、法律は道義を越え得ないし、それに代わるものでもあり得ない。

われわれは、道義的な力が行動に勇気と信念を与え、思想的な連帯の呼びかけの基礎であると考える。さらに、肥大し複雑化した現代社会で切り離された個々バラバラの局面に取り囲まれながら生活しているわれわれが、そうした局面を貫ぬき、道義的な力を政治的に、経済的、文化的、そして社会的に表現し、個別の場と空間の相違を越えうる変革のための理論的分析に、われわれの欠くことのできない任務を見出している。

「ロッキード」事件レポート

戦争・巢鴨・黒幕

額 二郎

はじめに

「確たる証拠は無い。が、ある時、私が提案した現代政治のゆがみを改革するためのある試案が、もし失敗した時は、クイーターでも起こすしかないだろうと、児玉の本心をさぐるつもりで訪ねると、「併し、何をやるのにも金が必要でしょう。青年は純粋に命を捧げてくれるものとしても、あとに残った家族が気の毒でしょう」と児玉は低い声でいった。(中略)「そりやそうです。たとえ汚れた金でも、自分で作って国の掃除が出来りやア理想的です……とにかく川内さん、私は表面では動けない。あなた、がんばって下さい。焦らずゆっくりやりましょう」これが児玉普士夫のこたえだった。私はいま、ロッキード問題で児玉がなんのために二十億もの金を集め

ていたかを考えている。このことについてはマスコミも触れようとはしない。」

これは事件後児玉とその信条を共にしてきた川内康範が、週刊時代四月二十九日号に「ロッキード事件にまつわる金は私情のためか、革命のためか？」のサブタイトルで「敢えて児玉普士夫を弁護する」と病床の児玉に書きつづった中から抜き出したものである。

政財界との結びつきが強い児玉を批判し、右翼はそもそも反体制的であると主張する新右翼と呼ばれるグループの代表格鈴木邦男が、昨年十月に出版した自著「腹々時計と狼」において「右翼も左翼もない、僕は狼の純粋で健気な姿に共鳴する」と言っているが、この川内↓児玉の弁護もこれと一脈を通ずるものがある。

さて、『戦後秘史』執筆のためロサンゼ

ス滞在中の大森実が、米国某筋から日本政府高官名を連ねた文書を手にしたと五月四日の新聞は報じている。これを直ちに公表することは戦後の疑獄事件(昭電・造船・売春・田中彰治・吹原産業、共和製糖・日通等)の如く、小物を売り大物を助けるスケープ・ゴートになる可能性があるとして検察庁の発表まで公表を控えるところ。腐ったビーナッツを喰べた当の政府高官諸兄は今、どのようなおもちであるか知るよしもない。

二月四日チャーチ委員会がロッキード社の日本へのワイロを報告して以来、人々の関心は、チャーチ委員会が昨年一月以来暴露して来たCIAとロッキード社、そしてワイロを受けた日本人との関係などに集まっている。

チャーチ委員会自体が、米帝の日本など反共波堤諸国の人事更迭戦術による暴露演出と見る事も出来よう。しかし米帝が人々にその弾圧戦術の一部を見せたと判断してその実体を追及して行くことが、ワイロを誰が得たか、政権は変わるかといった問題よりも重要かと思う。

もの足りぬ、またはまったく別の角度からナンセンスと一喝されるやも知れぬという気もするが、小生なりの事件の断面をこのレポートで現わしたい。

児玉普士夫

〇IA (中央情報局) は一九四七年、ソビエト側の諜報作戦に対抗してトルーマン大統領がNSA (国家安全保障法、一九四七年七月二十六日制定) に基づき創設している。

〇IAの前身は、一九四二年にルーズベルト大統領が新設した大統領直屬機関OSS (戦時情報局、一九四五年解体) で、児玉ら日本軍情報機関員は終戦直前↓敗戦へと直進する中でOSSとコネクションをもちはじめ、巢鴨プリズン入獄中も通訳に当った福田太郎らOSS連絡員と接触をもち続け、米国の反共政策協力を誓って単鴨を出たといわれる。このいきさつについては後述するとして、最近の新聞記事に確かな情報として児玉の働らきぶりを示すものがあるので紹介しよう。

児玉は、一九五八年スカルノインドネシア大統領と帝国ホテルで会っている。会見の目的はCIAが児玉に依頼した、スカルノが共産主義者であるか否かを確かめることであり、スカルノは児玉に「自分は共産主義者ではない。民族主義者である。親北京派連中を容認しない」と答えた。(一九七六・五・三ザ・デューリーヨウリ)

一夜で数十万の共産主義者が逮捕されたといわれる一九六五年の九月三〇日事件、そして自衛隊と三菱重工を頂点とする産軍企業を

作り出した朝鮮戦争などのフィクサー(仕掛人)が〇IAといわれる今日、〇IAの手掛右翼児玉普士夫は東南アジアの戦後史の範疇で捕えていかねばならないだろう。

A級戦犯児玉が巢鴨プリズンを出獄したのは一九四八年十二月二四日である。児玉は三四歳であった。同獄仲間には東条英樹(元首相)をはじめ岸信介(元東条内閣商工大臣)、笹川良一(元国粋大衆党党首)、青木一男(元大東亜相)などがある。一説では、児玉はB・C級戦犯(殺人・掠奪などが該当者)であったが、上海(児玉機関があった)から持ち帰った宝石・貴金属(時価数千億円といわれる)でOSSにとり入り、A級戦犯グループに入ったといわれる。

この説については元極東裁判検察部局長のエドワード・D・モナハンが「自分は児玉を一對一で十五回尋問したが、彼はA級戦犯(ウォー・クリミナル)などではなく、B・C級戦犯(ミリタリー・クリミナル)だった」(週刊文春一九七六年四月二三日)といっているのが興味深い。

この事件の中心人物と目されている児玉普士夫なる人物の戦歴的役割は、前にも述べた東南アジアの領域からと共に、米国(〇IA)の反共政策に使われた消耗品としての人物群の一人として観るべきだと思われる。

児玉の巢鴨プリズン出獄以後に起こった主

要な事件を列記してみると、

- ・一九四九年七月五日 || 下山事件
- ・一九四九年七月十五日 || 三鷹事件
- ・一九四九年八月十七日 || 松川事件
- ・一九五〇年 || レッドパージ
- ・一九五〇年六月二五日 || 朝鮮戦争始まる
- ・一九五〇年八月 || 警察予備隊設立
- ・一九五七年十月 || 国防会議ロッキード決定

防衛庁の五七年の第一次BX(次期主力戦闘機)ロッキード104J以外は児玉が関連しているという確証はない。しかし、この一連の経過で児玉が動いたと仮定し、児玉が政界の黒幕といわれ続け、マスコミは児玉普士夫という氏名活字が正面切って組めず、警察、検察庁、与野党をきゅうじっているといわれたこの児玉の背後にCIAの反体制封じ込め政策があると考えるならば、この一連の権力側の陰謀の中に大衆運動はその深さと拡がりや固定化させられたといえよう。権力側にとって、大衆運動を陰謀によって覚醒させることはならわしてある。

〇IAとのつながりは明らかにされていないがA級戦犯児玉と同獄仲間であり、在命の岸信介と笹川良一の(プロフィール)を次に紹介する。

岸は周知のように、一九五七年に内閣を組閣し、一九六〇年、数十万におよぶ抗議のシユプレヒコールが轟く国会で、「国会をとり巻いている者は国民全体からみればほんの一部であり、大多数の国民は支持している」とうそぶき、日米安全保障条約を強行採決させた男である。今回のロッキード社のF104 J購入を決定した日本側最高責任者(国防会議が決定し、議長は当時首相の岸であった)でもある。

今回のロッキード事件の引き金になったこの第一次F XF 104 J決定の経過を詳しく追ってみよう。

・一九五七年六月 政府は航空自衛隊の主力戦闘機F 86 Fの性能が旧式化してきたため、五八年度からの五ヶ年計画に超音速ジェット戦闘機三百機を補充することを決定。

・五七年八月、調査団渡米、ロッキードF 104 C、ノースアメリカンF 100、ノースロップN 156、コンベアF 102の機種調査。

・五八年一月、F X最終調査団渡米。政府がマークしていなかったグラマンF 111 Fを報告。

・四月十二日、国防会議グラマンF 111

岸は又、第二次世界大戦被害国の東南アジアに対する日本賠償で私腹を肥したと国会で追及されている。税金で日本賠償はビルマ、フィリピン、インドネシア、ベトナム諸国に物資供与の形で支払われた。岸が東条内閣の商工大臣時代、商工省管轄下におかれた鉄鋼統制委員会にいた木下茂が経営する木下産商に、インドネシア賠償の船舶十隻の内九隻を受注させた。(一九五九年二月十三日衆院予算委)この他ベトナム賠償の日本工営など商社の独占的受注も追及され、岸は熱海の別荘(木下産商が建てたといわれる)はもとより数億円のりべートを得たといわれている。これが事実だとすれば、岸は人々を戦争に狩り出し、戦後、果鴨ブリズンからのうらと出獄、首相におさまり、血税で支払われた賠償で私腹を肥やすという脅しと詐欺を得意とする小人である。

笹川 良 一

「わたしは、こちらからクーデター、暴力革命はやりません。しかし祖国日本に暴力革命をやるものが現われたときは受けて立つ。陣頭指揮やります。そのため、八百万の人間を持つとする。吟劍詩舞二百五十万、空手百万、剣道四百万、こういう団体を握ってあるのですから」(週刊文春・一九七一年一月二九日)。これは笹川が安保の後に語ったもの

F 内定

このグラマン社内定の裏には、岸が国防会議で、グラマンを採用すれば一機につき一千万円(三百機で三十億円)のりべートをグラマン社が渡す約束を取り付けてあり、国防会議以前にすでに一億円が渡され、一方グラマン社は自社採用を見越して、当時不況の自社株を伊藤忠ニューヨーク支社(ロッキード社は丸紅)と先物買いをし、その内二十億三十億円を津島寿一防衛庁長官らを通して五月の総選挙の岸派資金源にりべートとして流す工作を立てたという。しかし、国防会議は児玉と結びついているといわれた河野一郎らの反対により、岸は決定までもつていけず内定という形にせざるを得なかった。

五八年度からの五ヶ年計画に組み入れられる予定であった第一次F Xは、五九年六月十五日の国防会議でこのグラマン機が白紙還元され、十一月六日の国防会議で児玉が売り込んだロッキード社F 104 Jが正式決定される。

この一年半の間に、政商といわれる森脇将光(造船疑獄・千葉銀行事件で森脇メモと呼ばれる事件調査報告を国会で発表した)が、森脇メモを国会で発表し、児玉は公然とロッキードF 104 Cの優秀性を語るなど騒然たる状況であったという。このロッキード・グラマン攻防での金弾は想像を絶するものである。

である。

一九三六年の支那事変の最中、国粹大衆党党首としてイタリアに自家用機で乗り込み、ムッソリーニと会見し、日独伊協定の民間使節といわれた彼は、現在、日本船舶振興会(モーターボートレースの胴元)や小林寺筆法世界連合総裁など三十余団体の会長である。

「僕がモーターボートのことを考えたのは牢の中でのことだ。話が断片的になるがこの世の中は娑婆地獄なんだ。だから地獄にいて極楽の醍醐味を味わうことが必要だ。大学生でもあっても、娑婆を極楽にすることは不可能だと思っている。果鴨に入れられたときも、名譽あるA級戦犯なんだと思つて入った。生きて出られたのだから儲けものなんだ。」これは少し古い記事だが一九六〇年一月二五日の日本週報で笹川が語つたものである。笹川が児玉といかにかかわり、又CIAとコンタクトがあるのか否かは知るよしはないが、前に述べた児玉と岸ともども、いかに戦争責任というものを考えているかがこの笹川の言葉に現われていると見るのは穿つた見方であろうか。

笹川は果鴨出所後も国粹主義運動を続け、一九六六年アジア人反共産主義連盟を創立し資金供給を行ない、一九六八年には国際勝共連合の初代会長(顧問は自民党青木一男・玉置和郎・源田実など)に就任、東南アジアで

つたろう。

現在、このロッキード社からのワイロで取り調べ中の児玉の当時の動機を、週刊朝日(一九五八年十一月九日)は「五 months 後、東京世田谷の児玉邸に元海軍航空本部長で終戦の時自刃した大西中将の部下六、七名が集まった。大西中将は、例の「児玉機関」の生みの親であり、中将の死後、児玉氏や中将未亡人を交えて旧部下たちの会合は時々開かれていた。その日も、特攻隊の思い出や戦争の四方山話がかいたあと、防衛庁勤務の一人が憤然としてこんなことをいい出した。「今は政治優先というが、ひどいご時勢だ。われわれが二年近く研究した結果、F 104 (ロッキード) F 100 (ノースアメリカン)を選んだ。どの機種にするかで、防衛計画も変わってくる、それが急に回れ右をしてグラマンにきまつた。政党内の圧力もあつたが、防衛庁の一部にもこれとつながる勢力があつた。「ちょっと大げさない方をすればこの一言がグラマン騒動の導火線だったともいえる」と伝えている。

この児玉が、実はCIAから指令を受けていたとなると我々庶民にとつて、今更ではな

いが何を信じてよいか解らなくなる。そして、岸についてはグラマン社・ロッキード社双方からのワイロ二重取りの噂が当時からしきりといわれ、現在でも米航空業界は岸をコンサルタントとしてみているという。

は彼を国賓待遇の扱いをしている国もあると聞く。

小野田元少尉を三ヶ月間にわたつて大捜索をした際の調査団長がこの笹川良一であり、マルコス大統領は彼を「退役將軍」として歓迎したという。

小佐野賢治がベトナム戦争下のベトナムでバス、そして韓国では航空などの利権を持ち私腹を肥やしているが、この笹川には競艇以外に利権はないのであろうか? 児玉、岸と同輩仲間であることがますますその想像をふくらませるのだが……。

怒りを、希望に

児玉善士夫、岸信介、笹川良一らA級戦犯は日本人自身による戦争責任を問われることなく一方的に占領軍によつて果鴨入りし、数年後には一民衆の仮面をかぶつて現われた。一九五〇年の朝鮮戦争を中国、北朝鮮に対する威嚇と、日本国内の軍備はもとより東南アジアの反共体制を築きあげる為の米帝の作意的戦争であったと見るならば、彼ら果鴨ブリゾナー達は米帝にとつて無二の同志であつたに違いない。

児玉は上海の情報機関長、岸は満州を実質的に掌握していた商工大臣、笹川は、ムッソリーニと会見した国粹大衆党党首であつた。そして戦後の社会では、児玉は政財界の黒幕、

岸は首相、笹川はアジア人反共産主義連盟など東南アジアの反共組織者となり、米帝が独立日本で手を下していく分野の主要なポストに彼等はいるのである。兎玉以外にはCIAとのつながりを報じられてはいないが、このように米帝の反共路線と日本A級戦犯の戦前、戦中、戦後の軌跡をダブラしてみると、日米間の戦後の隠された黒いつながりが見えてくる。

ともかくにも今回のロッキード事件は政権交代や議会制民主主義堅持のためにウミを出す大手術、或いは前にも述べたように、米帝のポストベトナムの新たな共産圏封じ込めのための新陣営の人事更迭などという客観的な体制共喰の発想ではなく、いかに我々大衆が権力側の反革命的陰謀に対して無力、無防備であったかを反省しなければならぬのではないかと考える。

最後に、私がこのレポートを書いた動機を残りの紙面を借りて明らかにしておきたい。事件発生後、私自身、仕事に追われる毎日であるせいもあり具体的にほとんど行動しておられないので無責任さは逃れられないのだが、ただ黒い旗が一本でも今回の事件に対して抗議のデモを行なったと聞かないのが不思議でさえあるからだった。

多くのアナキストが大衆に向って話しをしないように思う。私は今迄街頭でアナキズム

を自称するチラシをもらったことも渡したこともない。しかし、そのことが最近非常に不思議に思っているのである。私は今迄、社会問題にぶつかつた時に、アナキズムの一般原理に無意識のうちに従ってきたような気がする。すなわち私の場合は直接的デモンストレーション、労働や刺学であり、政財界の腐敗に対しては間接的刺戟しか受けなかつたのである。しかし、大衆はどうであらうか？私が多くの人々と語り、行動を共にする最大公約で、しかもより直接的な物は「生活」を「労働」そして「政財界・議会制民主主義の宿命的腐敗構造」であり、しかも大衆はこれらに対して敏感なのだ。

このレポートは私にとってある内的変革を与えてくれるような気が今しているのだ。

勝田吉太郎が現代革命の考察というテーマで次のように語っている。「クレイン・ブリントンという学者が『革命の解剖』と題する書物を著わしています。非常な名著とは思いませんが、イギリス革命、フランス革命、アメリカ革命、ロシア革命といった歴史上の諸革命を丹念に比較した先駆的業績の一つです。ブリントンもまた結論的にこんなふうに言っています。これらの革命は「絶望の子供ではなく、むしろ希望から生まれたのである」と。そうした意味合いで、われわれが生きているこの「進歩の時代」というものは、変化の時

代でもあり、希望に基づく革命が起りやすいといった、そういう時代の体質があるのではないか。ことを換えますと、社会問題が革命的な役割を果たし出すのは、近代になってからであるといつてもよいでしょう。近代以前にあつては、長年の間、貧困や抑圧が人間と人間を作る社会的条件に不可避的なもの、いわば固有のものだと受けとられてきた。それが「進歩の時代」と呼ばれる近代に入つて、貧困や抑圧が人間の条件に固有のものだということに疑いはじめられるようになり、貧困の足枷から自由になり、抑圧の手枷から解放されるものだと考えるようになる。同時に貧富の間の差が不可避のものであり、永遠の秩序に属するものだというとも疑われるようになる。その意味で、革命とは近代特有の現象であらうと思うのです。」(諸君・一九七六年四月号)

絶望の子供ではなく、むしろ希望から生まれたのである。ロッキード事件に対する、「怒り」を昇化し、この「希望」へと持つて行くことは出来ないであらうか。

特集 学生運動の復興にむけて

何が忘れられていたか

六〇年代学生運動を顧みて

江口 幹

K君。お申し越しのこと、わかつた。確かにぼくは、君のいうように、六〇年後半の学生運動のあり方に興味を持っている。それを明確に把握することは、日本の戦後の左翼運動に見られるさまざまな欠陥と、それをどう越えたらよいか、という方向を示すことにならうと思つている。そして、その作業のための準備を進めてはいるのだが、しかしまだ準備そのものがすつかりすんではないんだ。だから、君の注文のように、六〇年代後半の学生運動をどう見るかということ、直接語ることは今のところできない。ただ、どんな視点から見ればよいか、ということについてなら一応は話せるのではないかと思う。

ぼくは、昨年末から今年の前半にかけて、一九六八年におけるフランスの五月革命の背景となつた思想について、かなりつつこんで調べてみる機会を持った。そして、そこで同じ若者の反乱といわれながらフランスと日本とでの、大きな質的相違に注目せざるをえなかつた。フランスでは、確かに新しい思想を残したし、それは現に発展をつづ

けている。が、日本では思想というほどのものは形成されなかつた。その差はいつたどこから来るのか、それをぼくとしては考えざるをえなかつたのだが、その点に触れる前に、五月革命を契機としてクロイズアップされるようになった、フランスにおける思想、革命運動の指導理念として独自の地位を誇つていた、マルクス・レーニン主義に代る思想とはどんなものか、その要点を簡潔に紹介しておきたい。

それは第一に、いわゆる社会主義国の実態の分析および批判を通じて、社会主義についての新しい解釈を提起している。これまでの常識主としてマルクス主義による常識だが、それによれば、所有が国有化され生産が計画化されている、という二条件が満たされている限り、社会の階級的な性格を決定する「生産関係」は社会主義であるとされてきた。この見方にしたがえば、ソ連ならびにその他のいわゆる社会主義諸国は、社会主義体制下にある。しかし、人間の人間による支配と搾取を廃止することが社会主義の目標だとすれば、それら諸国の実状あれが社会主義か、という疑問は当然のことながら生まれる。そこか